機動戦士ガンダムSEED ANOTHER WORLD

トランザムフリーダム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＡＮＯＴＨＥＲ　ＷＯＲＬＤ

【Ｎコード】

Ｎ２４６８Ｘ

【作者名】

トランザムフリーダム

【あらすじ】

ありえたかもしれないもう一つの可能性。キラがナチュラルに、カガリがコーディネーターに…。これは原作のＳＥＥＤと違う世界の物語。

プロローグ（前書き）

初投稿です。駄文ですがよろしくお願いします。

プロローグ

「…なんだ話しって？」　「ちょっと父のところに戻らなければならなくなった」
「そういえばお前の父さんプラントの偉い人だったな。やっぱり戦争になりそうかな…」
「まだそうと決まったわけじゃないよ。でも君は避難した方がいい。」
「…じゃあしばらくの間会えないな。」
「寂しいだろうけど大丈夫かい？」
「私を子供扱いするなよ！年一緒だろ！？」
「そういうところが子供っぽい」
「てめえ！」
「冗談だよ。…こうやってケンカするのはしばらくできないな。」
「ああ…。お前もがんばれよ。」
「それよりこれ」
というと少年は鳥型ロボットを取り出した。
「これは…？」
「前に君が作ってくれって頼まれたものだよ。名前はトリィ。君にあげるよ。大事にしてくれ。」　「あ…ありがとう」
と少女は頬を染めた。
（あいかわらずかわいいな）「じゃあもうそろそろ行くよ。」
「ああ…。アスラン。」　「ん？」
「好きだよ。」
「僕もだ……カガリ。」と二人はキスを交わした。
だが二人はまだ知らなかたった。そう遠くない未来に戦場でぶつかるとは…。

第1話（前書き）

続きです。

第1話

～アスランｓｉｄｅ～

「…ラン！アスラン！」

「ん？」

「大丈夫ですか？ぼ～としてましたけど。」

「すまないニコル。考え事してたんでね。」

「ふん！どうせびびったんだよ。」

「何を根拠に言ってるんだ？証拠は？」とわざとうざったく言ってやった。

「なんだと！」

「イザークどうどう。」「俺は馬か！？」

と漫才（？）をしてるのは同期のイザーク・ジュールとディアッカ・エルスマンだ。二人の漫才を苦笑しながら見てるのはニコル・アマルフィだ。「まあまあ、ざわざわしたいのは分かるが少しで作戦決行だ。気を引き締めろよ。」と先輩のミゲル・アイマンが漫才を止めた。

「この作戦は超重要だからな。失敗すれば…。」「分かってますよ。野蛮なナチュラルどもがＭＳ（モビルスーツ）を使うようになりからな。コーディネーターの専売特許だってのに。」

「戦争を長引かせたくないですね。」

とディアッカとニコルがミゲルに同意した。

「ああ…。ザフトのために。」

ザフトのために…か。あいつは元気にしてるだろうか。

～カガリｓｉｄｅ　～

「ザフトの進行は激しく、カオシュンが落ちるのは時間の問題でしょう。」とＰＣのニュースが報道された。

「大丈夫かしら？結構近いけど…。」
「大丈夫だろ？うちは中立だし。」
とミリアリア・ハウとトール・ケーニヒが談笑してた。二人はカップルらしい。
「カガリ。バランサーを調整してくれ。」と話したのはサイ・アーガイル。さっきの二人とあわせてカトウゼミの生徒だ。「ああ…ちょっと待って。」ここでは工学の勉強をしている。
「ありがとう。助かったよ。それにしてもまた戦争のニュースか。いいニュース聞かないな。」
「例えば？」
「う～ん…人気歌手が結婚宣言したとか？」
「このご時世に呑気に歌ってる人はいないと思うけど。カガリはどう？」「私はそういう世間のことは疎いからな。パソコンに夢中で。」
「カガリらしいや。」
なんか妙に馬鹿にされた気がするがスルーしよう。最近ことあるごとに怒鳴るからな。と考えていると、ドアが開いた。いたのは
「あの…カトウ教授はいますか？」
気の弱そうな少年だった。「カトウ教授になにか用かな？」とりあえず事情を聞いてみた。
「はい…聞きたいことが…」ドーン！！
「！？！？」
突然コロニーが揺れた。なんだ！？
「大変だ！ザフトの襲撃を受けてる」
は？なぜ中立なのに？ザフトは何を考えてるんだ？
「やっぱりあれのせいか…。」と少年がいきなり奥の方へ走ってしまった。
「おい！みんな先に逃げろ！」
「カガリは！？」
「さっきの奴助ける！」「気をつけろよ！」

みんなが逃げたのを見届けた後、私はさっきの少年を追いかけた。

第1話（後書き）

あ、ラスティ忘れた。けどいいか。
ラスティ「ちょっとおーーー！？」←雛壇芸人ばりのツッコミ。

第2話（前書き）

戦闘描写が下手ですが温かい目で読んでください。

第2話

もうところどころ瓦礫やらなんやらが散乱している。なんで中立のコロニーを襲ったんだ…！それよりさっきの男の子はどこだ？としばらく走っているとさっきの男の子がいた。怪我をしているのか片足を引きずっている。
「おい！」
「あなたはさっきの…。なんですか？」
「なんですかじゃねぇよ馬鹿！今の状況分かってるのか！？」と怒鳴ると「す…すいません。」と少年は怯えながら応えた。
「でも確かめたいことがあって…。グ…！」
「でも足を…！…仕方ない肩貸してやるからその『確かめたいこと』とやらがあるところに一緒に行ってやる。それで満足か？」
「すいません…。」と少年は応え手を私の肩にのせた。
「…たくなんで首突っ込むんだろう私…。」
「？何か言いましたか？」
「なんでもない行くぞ。」と私達は奥へ進んだ。
しばらくすると工場のような場所に着いた。よく見てみるとMSのようなものがあった。ザフトで量産されている『ジン』の単眼ではなく、人間のように二つ目だった。
「やっぱり…！なんで父さんはこんなことをーーー！」と大声で叫んだので下にいた作業員らしき女性に撃たれそうになった。
「バカヤロー！こっちは民間人だぞ！」
「民間人…？なぜここに？いやそんなことよりこれだけでも…！」とMSのところに行ってしまった。
「なんだよたく…！それよりも逃げないと！」
「逃げると言ってもどこに…？」と少年は泣きそうだった。
「こっちにシェルターがあったはず！走るけど大丈夫か？」

「はい…なんとか。」
シェルターに行くと近くのインターホンに話しかけた。
「おい！シェルターに入れるか？」
インターホンから男性が『もうギリギリだ！あと一人ってとこだ！』と応えた。
くそ…！じゃあ…！
「連れが怪我をしています！こいつだけでも入れろ！」
「…わかった。開けよう。」とエレベーターが来た。
「お前だけでも逃げろ！」
「え…？あなたは？」
「別のところから逃げるよ。ほら早く行け！」と無理矢理押しこんだ。エレベーターが行くのを見送ったものの…
「…どこから逃げるか…？」と途方にくれているとさっきの作業員がザフト兵の一人を撃ち倒した。が、そのあともう一人のザフト兵が作業員に撃ってきた。
「グ…！」作業員は肩を撃たれたのか肩を押さえながら物陰に隠れた。
「助けないと…！」と本能的に走って手すりから飛びおりた。これくらいの高さは平気だ。「大丈夫か！」
「さっきの…！グ…！」と作業員は呻いた。撃ってきたザフト兵がナイフを取り出しながらこっちに走って来た。私はそれを迎えうつために攻撃態勢にはいった。するとザフト兵が急に立ち止まると
「カガリ…？」と声をあげた。
…！その声は…！

～アスランｓｉｄｅ　～
チッ！ラスティが撃たれた！あれじゃあ即死だろう。このナチュラルが！拳銃を撃つが連合兵の肩に当たって弾が切れた。じゃあナイフで…！相手に向かって走ると誰かが相手の側にかけより迎えうつつもりかこちらを睨んだ。だがその目には見覚えがあった。自分が

一番大切な…
「カガリ…？」なぜこんなところに…？と混乱していると連合兵が拳銃を構えた。
「チッ…！」ここは撤退だ。このＭＳはほかに任せよう。しかしなぜ彼女がここに？
「ラスティは失敗だ！ＭＳが一機確保された！」とミゲルに通信をいれた。『…わかった。アスランは近くのＭＳ確保して撤退しろ！あいつは俺がやる！』と応えた。あいつはミゲルに任せるとして…。俺はＭＳを確保した。ＯＳ　を立ち上げコーディネーター用に調整した。
「ミゲル…。気をつけてくれよ…。」と俺は先に撤退した。

～カガリｓｉｄｅ　～
なぜあいつがザフト兵に？と考えていると作業員が
「あなた！こっちに！」と手をひかれＭＳのところまで来た。
「乗るわよ！」
「え…？でも」
「逃げるにはこれしかないわ！早く！」と急かされたのでＭＳに乗った。
「これだけでも…！」と電源をいれた。するとＯＳ　が立ち上がった。なんか色々英単語がでたが、その頭文字をつなげると
「Ｇ．Ｕ．Ｎ．Ｄ．Ａ．Ｍ…。ガンダム？」と読めた。そうこうしているうちに止め具を無理矢理外しながらガンダムが立ち上がった。といきなり、
「右！敵のジン！」
「…！」
ジンが襲いかかってきた。このままじゃやられる！と考えると一緒に乗った作業員がスイッチを押した。すると敵の攻撃が当たったのかガンダムが揺れたが傷ひとつついてなかった。でも…このままじゃやられる！

「おい！もうちょっとうまく動かせよ！」
「仕方ないじゃない！まだＯＳが未入力なのよ！」「じゃあどけ！」
「は？」
「…私が動かす！」とキーボードを出し、入力した。作業員が驚いたような表情をしたがそれもそうか。ナチュラルじゃできない諸行だからな。そして入力が完了した。よし！これで…！「ハー！」相手に蹴りをいれた。突然のことで対処できなかったのかまともにはいった。だがまだ立ち上がった。
「このヤロウ！」
相手にパンチやキックを叩きこんだ。ところどころへこんではいるがまだ動けそうだ。
「あなたもうちょっと丁寧に扱いなさい！武器があるでしょう！」
「それを先に言え！って頭部バルカンとナイフしかないじゃないか！？」「まだ整備中だったの！文句言わないで早く！」「わかったよ…！」
腰からナイフを二本取り出した。相手が剣で切りつけてきたが、片方で受け流しもう片方で相手の頭部に突き刺した。相手のジンは動かなくなった。
「ふぅ…。」やっと終わった。が…
「早く離れなさい！」と作業員が叫んだ。するといきなりジンが自爆した。
「ウワーーー！」と吹き飛ばされた。
「いつつ…。」頭を打ったが私は平気だったが作業員が気絶していた。
「どうしよう…？」と考えているとゼミのみんなが駆け寄ってきた。よかった無事だった！さてと降りて合流するか。この作業員も降ろそう。なんで中立のコロニーにＭＳがあるのか知ってそうだし。

第2話（後書き）

ラスティ「結局セリフねぇ…ｏｒｚ」
ラクス「まあ仕方ないですわ。」
ラスティ「いきなり出てこないでくださいよ！というよりまだあなた出てませんよ！」
ラクス「わたくしは原作の方ですから関係ありませんわ。」
ラスティ「え〝…？」
ラクス「これから後書きには主人公四人が仕切りますので読者の皆様よろしくお願いしますわ。」キラ・アスラン・カガリ「よろしくお願いします。」
ラクス「あとラスティさんはもうでませんので。」
ラスティ「ウワーンーーー！」

第3話

ミリアリア「カガリ！大丈夫？」
カガリ「ああ…まあな。みんなも無事か？」
サイ「ああ怪我ひとつしてないよ。」
トール「まあ、シェルターがもうないから脱出できなかったけどな。」
はは、と笑いながらいった。
トール「それよりも凄いな！ＭＳの戦い！あれお前が操縦したのか？」
カガリ「ああ…まあな。でも興奮する気持ちも分かるが、なんで中立のコロニーにこんなのがあるのか気にならないか？」サイ「そういえば…。」カガリ「完全な条約違反だ。…まあ一人関係者らしい奴がいるからそいつに聞くよ。名札みたら連合兵らしい。」とベンチに横たわる女性を指さした。
ミリアリア「そう…。気をつけてね。連合軍だからあなたのこと…」
カガリ「分かってるよ。お前らはそのＭＳの近くにいｒ…」ドキューン！
カガリ「！」
連合兵「あなたたち！それから離れなさい！」
さっきまで気絶していた連合兵が目の覚ましいきなり威嚇射撃をした。
ミリアリア「キャア！」サイ「なんだ！」
トール「何するんだいきなり、驚くじゃないか！」
連合兵「それは我が軍の機密事項なの！無闇に触らないでちょうだい！」と声をあらげていった。カガリ「我が軍？…やっぱり連合軍のものか？」トール「何だよ！連合がなんで中立のコロニーでＭＳ造っているんだよ？」

サイ「完全な条約違反だぞ！」
連合兵「黙りなさい！何もわからないのに！これが現実なの！外ではこういう戦闘行為は当たり前なの！現実から目をそらして…！」
連合兵はあまりの怒りからか子供あいてに熱弁をふるった。
カガリ「黙れ。」
連合兵「！？」
ミリアリア「ちょっと…！カガリ！相手は銃を持ってるのよ！怒らせるようなことは…」
カガリ「大丈夫だ…。…お前の言いたいことはわかるが私達は戦争が怖くて中立のコロニーに住んでいる。それをブチ壊したのはお前ら連合だ。」連合兵「でもあなたたちの年齢で戦っている子もいるわ！」
カガリ「軍がそんなんでいいのか？…マリュー・ラミアスさん。」
マリュー「あなたなぜわたしの…？…名札を見たのね。」
カガリ「ああ…それよりもどうしてくれるんだ？偽りとはいえ平和だった生活が送れなくなった。責任はとってくれるんだろうな？」
マリュー「…」うつむいたまま何も答えなかった。拳を握りしめたまま。カガリ「どうした？何か言いたいことでもあるのか？」
マリュー「ごめんなさい…ちょっと焦っていたのよ。」カガリ「お前の本心じゃないのか？」
マリュー「ええ…それに触れられていたから慌てちゃって…。」と頭をかかえながら答えた。
サイ「ふう…。」
ミリアリア「一時期はどうなるかと思ったわ。」みんなも安堵したような顔をした。
マリュー「ごめんなさい…巻きこんでしまって。」
カガリ「？お前が責任者じゃないのか？」
マリュー「ええ…私は上層部から命令されただけよ。確かに不信感はあったわ。でもこれが生産ラインにのれば戦争が終わるかもって一心で…。」カガリ「…」

トール「なんか悪い人じゃなさそうだな。」
と安堵した瞬間だった。サイ「あれは…！ザフトのＭＳ！」
ザフトのＭＳがこのコロニーに入ってきた。
マリュー「これを奪うつもりね…！」
ミリアリア「ど、どうするの？」
マリュー「これを奪われるわけにはいかないわ！」カガリ「でも動かせないだろ？」
マリュー「く…！」マリューは悔しそうに唇をかんだ。
カガリ「仕方ない。私が行く。」
マリュー「え…！？」
カガリ「勘違いするなよ。友達を救いたいだけだ。お前らは逃げろ。」
トール「大丈夫なのか？」
カガリ「マリューさんには悪いが奪われようが奪われまいがどちらにせよ足止めにはなる。…けど装備が不安だな。」
マリュー「な、ならパックを使って！」
カガリ「パック？」
マリュー「そのＭＳ…『ストライク』の装備よ！近くに『ソードストライカー』があるわ！」
カガリ「わかった。使ってみる。…ほらみんなは逃げろ。」とカガリはストライクに乗り込みソードストライカーを装備した。
カガリ「敵は３機…。よし！」
カガリは機体をジンに向かわせた。相手はマシンガンを撃ってきたがＰＳ装甲（フェイズシフト装甲）のおかげで平気だがバッテリーの消費を抑えるため避けつつ接近した。
カガリ「当たれ！」と肩にあるブーメラン『マダインメッサー』を投げた。マダインメッサーは見事ジンに直撃し爆発した。
カガリ「よし…！」今度は腕についているアンカー『パンツァーアイゼン』を発射しジンの足に巻きつけて引き寄せナイフをコックピットに突き刺した。

カガリ「ラスト！」
ソードストライカー最大の特徴である対艦刀『シュゲルトゲーベル』で最後のジンを切り裂いた。カガリ「これで終わりか…？」と思ったがコックピットの警報がなった。カガリ「なんだ！」
マリュー「気をつけて！奴らG兵器をもう投入してきたわ！」と通信がはいった。カガリ「もうか！」と上を見上げると赤い色の『イージス』と白いろに塗装された『シグー』がきた。
カガリ「チッ…！」と舌打ちしたときだった。
？？？「カガリ！」とイージスから通信がはいった。
カガリ「…！ア、アスラン！？」

～アスランｓａｉｄ　～
やっと見つけた！クルーゼ隊長に無理いって正解だった。
カガリ「…！ア、アスラン！？」むこうから驚いたような声をあげた。
アスラン「なぜ君がそんなのにのっている！？」カガリ「わ、私は友達を助けるために戦っている！そもそもザフトが攻撃したからこうなったじゃないか！」
アスラン「ナチュラルがＭＳを造るから…！」
カガリ「ここは中立だ！手段を選べ！民間人だっているんだぞ！」
アスラン「これは戦争だ！手段なんて選んでいられん！」
クルーゼ「アスラン！誰としゃべっているのか知らんがこいつを確保するぞ！」とシグーでストライクに蹴りをいれた。
カガリ「キャア！」とカガリの悲鳴とともにストライクがぶっ飛んだ。
アスラン「どうすればいいんだ…！」とアスランは唇をかんだ。

第3話（後書き）

カガリ「なんか雰囲気がずいぶん違うな。」
キラ「うん、みんなを引っ張るリーダーシップもあるし。」
カガリ「…そういう言い方だとまるで私はリーダーシップがないみたいだが職業柄困るのだが。」アスラン「それよりも今回でいろいろ名前でたな。」
ラクス「ストライクやマリューさんの名前もでましたからね。」
キラ「これからどうなるか楽しみだね。」
アスラン「ああ。じゃあ次回をお楽しみに。」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜カガリ「これキラと私の立場を逆にしたんだよな?」
キラ「今更なに言ってるの?」
カガリ「変えてくれないと困るシーンがいくつかあるからな。」
アスラン「例えば?」
カガリ「フレイとの関係。」
キラ「…」
アスラン「…」
ラクス「…」
カガリ「なんで黙る!?不安になるじゃないか!作者!絶対変えろよ!」

第４話（前書き）

前回書き忘れましたが書き方変えました。

第４話

カガリ「キャア！」シグーに蹴り飛ばされ吹き飛ばされたストライク。
カガリ「こいつ…！」
シュゲルトゲーベルをを振るうがまるっきり当たらない。
クルーゼ「ふん…！その程度か…？」クルーゼも避けながらマシンガンを撃つ。
カガリ「く…！」ＰＳ装甲に守られてはいるがそれにも限界がある。
バッテリーが切れればそのＰＳ装甲が解除され実弾でも撃墜される。
クルーゼ「これで…。む…！」
カガリ「？」
いきなりシグーが別の方向に向かって飛んだ。
アスラン「隊長？」
クルーゼ「そのＭＳは任せる！…宿命なのかね…ムウ・ラ・フラガ！」
シグーの先には連合軍ＭＡ（モビルアーマー）『メビウス・ゼロ』がいた。
ムウ「ラウ・ル・クルーゼ！」
クルーゼ「やはり運命なのかね！」
ムウ「さかしいことを！」いきなりシグーとメビウス・ゼロの戦いが始まってしまった。
カガリ「なんだかわからないが助かっ…てないか！アスラン！」
シグーの介入によってすっかり蚊帳の外のイージスに機体を向いた。
アスラン「俺と戦う必要はないはずだカガリ！同じコーディネーターだろ！？」
カガリ「分かっているけど…ここには友達がいるんだ！簡単には引けない！」
アスラン「く…！」

ミゲル「アスラン！」
カガリとの会話で集中できないのか押さえぎみになったアスランを見かねてミゲルがジンを向かわせた。
ミゲル「お前は先に撤退しろ！まだ慣れないだろ！？後は俺に任せろ！」アスラン「…わかった。」アスランは素直に撤退した。ミゲルなら大丈夫だと思ったからだ。緑服だがザフトでも名が知られているエースだ。捕獲してカガリを連れてくるだろう。だがアスランの予測ははるかに違うものだった。

ミゲル「ウオォォ！」
ジンを突撃させながらマシンガンを撃った。
カガリ「…」だがカガリは至って冷静にバックステップしながら避けた。ミゲル「な…！」さすがのミゲルも驚いた。さっきから一発も当たらないからだ。
ミゲル「クソォォ！」ミゲルは激昂しマシンガンを捨て剣を構えた。
カガリ「こい…！」カガリもシュゲルトゲーベルを構えた。
ジンは剣を振っただが…ストライクはシュゲルトゲーベルを地面に突き刺しストライクはその上に逆立ちのような姿勢になった。
ミゲル「な…！」
ジンの剣はストライクではなくシュゲルトゲーベルに当たった。ストライクはジンの後ろに着地しシュゲルトゲーベルを振った。
カガリ「ハアァァ！」
ジンも突然のことで反応できなかったなかったのか棒立ちだった。
シュゲルトゲーベルはジンを横一文字に切り裂いた。
ミゲル「グオォォ！？」ドーン！ジンは爆発した。

一方シグーとメビウス・ゼロは一進一退の戦いを繰り広げていたがメビウス・ゼロが少々不利だ。ムウ「くそ…！」
ムウは焦った。その時ストライクがジンを撃墜していた。その動きは素人のものではなかった。

ムウ「凄いな…。」と感心した瞬間機体が揺れた。どうやら被弾したようだ。
ムウ「これまでか…！」ムウが諦めかけた時だ。横からビームが飛んできた。シグーに向けられたものだ。ムウが見た先には白亜の戦艦がいた。
ムウ「アークエンジェル！やっときたか！」
ナタル「大尉、遅くなりました。」通信にでたのは女性士官だった。
ムウ「助かったぜ！でも艦長は男って聞いていたんだが…？」
ナタル「…クルーはほとんどが死亡しました。少数しかいなかったので発進に時間がかかりました。」
ムウ「…そうか。とりあえずそっちに着艦する。」
ナタル「了解しました。ストライクのほうは…」といいかけたとき、通信がはいった。
マリュー「アークエンジェル応答して！こちらマリュー・ラミアス大尉。」
ナタル「大尉！無事でしたか！」
マリュー「なんとか…。こちらもやられたわ。」ナタル「そうでしたか…。ストライクはどうするんですか？誰が乗っているんですか？」
マリュー「事情はそちらで話すわ。とりあえずそっちに合流します。」と通信切った。

ナタル「誰ですかその民間人は？」
マリューと合流したナタルはそう質問した。
マリュー「このコロニーの住民みたいだけど脱出できなかったなかったところを保護しました。問題でも？」
ナタル「ストライクは機密事項ですよ！民間人に触れさせるわけには…」マリュー「もう遅いわ。」といったとき、ストライクのコックピットから誰かが降りてきた。
ナタル「まさか…！」

マリュー「民間人が操縦していたもの。」
降りてきたのは金髪の少女だった。
ムウ「まさかあの子が？」
マリュー「ええ…。」
ムウは驚いた。あんなダイナミックな操縦をしていたのが年頃の少女だったからだ。
カガリ「いたた…。」
ミリアリア「カガリ大丈夫？」
カガリ「ああ…さっき吹き飛ばされたとき腰打っただけだ。心配ないさ。」と腰を抑えながら答えた。
マリュー「ごめんなさい…こんなことに巻き込んでしまって…。」
カガリ「ああもう大丈夫ですよ。」
ムウ「慣れているのか？」
カガリ「あんたは？」
ムウ「俺はムウ・ラ・フラガ大尉だ。さっきのメビウス・ゼロのパイロットだ。感謝しろよ？俺が来なかったら今頃やられていたぜ？」
カガリ「お前だってやられていたじゃないか。」ムウ「…最近の若者は態度がなっていないな。それより君はコーディネーターだろ？」
ナタル「え…？」
カガリ「…ああそうだ。」と答えた瞬間カガリに周りの連合兵が銃を向けた。
トール「やめてくれ！」ミリアリア「カガリは私たちを助けただけよ！」マリュー「そうよ…。銃を降ろしてちょうだい。」
連合兵「しかし…！」
ムウ「やめるんだ。…なんで君はコーディネーターなのに俺たちを助けた？」
カガリ「私は友達を救いたかっただけだ。」
とムウたちを睨んだ。
ムウ「わかった。信用しよう。」
マリュー「ありがとうございます。」

カガリ「そんなことよりどうやって脱出するんだ？外にまだザフトがいるかもしれんぞ？」
ムウ「この嬢ちゃんの言う通りだ。俺の機体はさっきので修理する必要がある。アークエンジェルだけじゃもたないな。」マリュー「そのことなんだけど…カガリさん。またストライクに乗ってくれないかしら？」
サイ「なにを言っているんですか！？もう関係ないでしょう！」
マリュー「ごめんなさい…これしか生き残る方法はないわ。…どうするの？」
カガリ「…わかった。私も生きたいからな。」
マリュー「いいの？」
あっさりと承諾したのでマリューは驚いた。
カガリ「二言はない。私がみんなを守ってみせる！」

第４話（後書き）

アスラン「ミゲルいつも通りに逝ったな。」
キラ「いつも通りって…まあいいや。」
ラクス「今回アークエンジェルの主なメンバーがそろいましたね。」
カガリ「それにしても私凄い戦い方したな。」
キラ「ミゲルを撃墜したときの動きは龍が〇く見〇のヒー〇アクションを参考にしたらしいよ。」アスラン「また凄いゲームから参考にしたな。いいゲームだが。」
カガリ「でも作者はＰＳ３持っていないから動画を見て参考にした。欲しいな…とくに４がやりたい」←作者の愚痴
アスラン「まあそこまでにしろ。次回は…」
ラクス「ランチャーストライカーが登場します。」
アスラン「っておい！それだけ？」
キラ「まだあるよ。フレイとｋ」
カガリ「でなくていい。」←貞操的な意味で

第5話（前書き）

短いです。

第5話

カガリ「今度は射撃に特化したパックか…。」
カガリはストライクにランチャーストライカーを装備させた。
マリュー「『アグニ』を使用する際は気をつけて、バッテリーがたくさん消費するから。」
カガリ「了解した。行くぞ！」
ストライクが飛び出ししばらくするとザフトのＭＳがいた。ジンだったが装備が要塞攻略型のＤ装備だった。
カガリ「あいつら…！ここごと破壊する気か！」ザフトはここが中立ではないと判断したのだろう。
カガリ「これが戦争だってわかってる。だけどな…！」カガリは怒りが込み上げた。
カガリ「ここで何人犠牲になったのかてめえらわかっているのかー！」
と怒りとともにアグニを発射した。威力は凄まじく複数のジンを巻き込んだ。だが…
カガリ「な…！コロニーの壁まで！」
アグニはジンを貫いても威力が衰えることがなく、コロニーの壁まで貫いた。だがさっきのジンが最後だったのか機影はなかった。
カガリ「もう終わったのか…？」そう思った瞬間だった。
コロニーがいきなり崩れだしたのだ。シャフトや柱も歪み、コロニーの壁に何個か穴が開いた。そこからストライクが吸いだされた。
カガリ「キャアー！」

～～～～～～～～～～カガリ「ううん…。」
どこか頭を打ったのか気絶していた。ストライクがいるのは宇宙だった。カガリ「コロニーは…？」さっきまであったヘリオポリスが

なかった。これが現実。これが戦争とカガリはぼんやりと考えた。
カガリ「アークエンジェルは…？」しばらくアークエンジェルを探していると脱出ポットがあった。カガリはそれを回収した。と同時にアークエンジェルも見つけた。無事だったらしい。

カガリ「凄いなこの艦は…。」
トール「それよりも早くポット開けてみようぜ。」
連合兵がいくつか操作してポットを開けた。そこには…
サイ「フレイ！」
フレイ「サイ！よかった無事だったのね！」
出てきたのはカガリが通う学校のアイドルでサイの恋人のフレイ・アルスターだった。
あとクラスメートのカズイ・バスカークもいた。トール「よぉカズイ！お前も無事だったか！」
カズイ「うう…怖かった…。」
カガリ「これで全員か…。あとは無事脱出したのかあるいは…」
ミリアリア「よしてよカガリ…考えたくないわ…。」
カガリ「ああ…すまない。」
ナタル「また民間人が増えた…。」喜ぶカガリたちとは対照的にナタルは頭を抱えていた。
マリュー「私が艦長に…ですか？」
ムウ「ああ、俺は君と同じ階級だが船のことはあまりわからない。任せるよ。」
マリュー「…わかりました。マリュー・ラミアス大尉、任につきます。」とはいったものの、やはり不安があった。民間人はいるし、ストライクはコーディネーターが乗っている。クルーも少ない。
マリュー「大丈夫かしら…。」マリューはそう呟くしかなかった。

第5話（後書き）

カガリ「フレイ出てきちまった…ｏｒｚ」
フレイ「私だってそんなシュミはないわよ！」
キラ「大丈夫だよ。作者この手のこと苦手だからね。」
カガリ「な…！心配して損したじゃないか！」
フレイ「よかった…。？じゃあ私どうなるの？」キラ「原作より地味になると思うよ。」
フレイ「それは避けられないわね…。せめてパパが生き残ってパパと一緒に帰るっていう展開にしてほしいわ。」
カガリ「それを決めるのは作者だからな。お楽しみってとこだな。」
アスラン「さて次回は！」
ラクス「やっとエールストライカーが出ますわ。」
カガリ「本当にやっとだな。作者いくつかの戦闘とばしたいとかほざくし…。」
ザフトのみなさん「俺たちが地味になるだろうがーーー！」

カガリ「Ｇジェネの続報がでたな。」
キラ「作者は３ＤＳ持ってないけどお年玉で買うみたいだよ。」
アスラン「精神コマンドか…。ますますスパ〇ボみたいだな。」
ラクス「まあ例のごとくどっかの誰かさんは必中が遅いでしょうね。」

ルナ「くしゅん！」
メイリン「お姉ちゃん風邪？」
ルナ「誰かが私の噂したきがして…。」
メイリン「そんなことより射的やってあれほしいから。」
ルナ「わかったわよ。全弾当ててみせるわ！」

メイリン「全弾…なんだっけ？」
ルナ「あれ、おかしいわね…？」←例のごとく外した。

第6話

ムウ「嬢ちゃんパイロットスーツのサイズはあうか？」
カガリ「…ああ大丈夫だ」
ムウ「そうか。ウエストがきつくて着れないかと思ったが」
カガリ「私は結構痩せているぞ！失礼なこというな！」
ムウ「悪かったよ」
カガリはパイロットスーツを選んでいた。さすがにいつまでも私服でいるのはきつい。
カガリ「そういえばどこに向かっているんだ？」ムウ「ああ…そのことだが…。今から水を補給しにユニウスセブンに行く」
カガリ「そうか…あそこには凍った水があるからな。墓泥棒みたいな真似で嫌だな…」
ムウ「コーディネーターだから気分が悪いのは分かるが生きるためだ」
カガリ「コーディネーターだからとか関係ない。モラルとかそんな感じに行っただけだ」
ムウ「…まえから思ったんだが…君は本当にＭＳに乗ったのははじめてか？なんか場馴れしてるっていうか同類のコーディネーターをためらいもないし…」
アークエンジェルはこれまでザフトと交戦したがカガリとムウ…まあほとんどがカガリの活躍でここまで来た。
カガリ「…そんなのどうでもいいだろ？手心加えて落とされたら嫌だろ？」
ムウ「まあ…そうだが…」
カガリ「…さてと墓荒らしにいきますか」
とカガリはパイロットスーツを着て格納庫に向かった。ムウはカガリに対する不信感をぬぐえないでいた。

カガリはエールストライカー装備のエールストライクに、ミリアリアとトールは作業用スーツに乗り、水資源を回収していた。
ミリアリア「不気味なところ…」
トール「ああ…死体もあちこちにあるし…」
このユニウスセブンは連合軍の核攻撃に遭い、多数のコーディネーターが死亡した。
カガリ（そういえばアスランの母さんもここにいたんだな…）
幼い頃、料理を作ってくれた思い人の母の顔が思い浮かぶ。
とものふけっているとコックピットのアラートがなった。レーダーで確認すると偵察型のジンがいた。なんでここにとは思わなかった。
むしろ当然だと思った。
だがジンはこちらに気づいていない。
カガリ「そのまま通り過ぎろよ…！」
だがカガリの願い空しくジンはこちらに気づき狙撃してきた。
カガリ「そのまま見逃せばいいものを…！」
カガリはストライクのビームライフルでジンを撃破した。

ナタル「…君は拾いものが好きだな…」
マリュー「いいじゃない。人命救助も」
カガリは帰還中にポットを見つけ回収していた。が、そのポットがザフトのものだったので警戒して銃を構えている。
マードック「さあ…開けますぜ」
と恐る恐る開けた。そこから…
???「ハロ、ハロ！」
「「???」」
???2「みなさんご苦労さまです」
そこから球型のロボットとピンクの色をした髪の毛を持つ女性が出てきた。
???2「…あら？ここはザフトではないのですか？」

女性はここにいるのがザフトではないとわかると困惑していた。

ムウ「…であれは誰なんだ？」
マリュー「名前はラクス・クラインだそうよ」
ムウ「クラインってまさか…！」
ナタル「ええ…あのザフトの現議長シーゲル・クラインの娘だそうです」ムウ「あちゃーなんちゅうもん拾ってきたんだあの嬢ちゃんは…」
マリュー「悔やんでも仕方ないわ」
ムウ「で、いま娘さんはどこに？」
マリュー「今はカガリさんと一緒にいるわ。コーディネーター同士だし女性同士だから彼女に任せたわ」
ナタル「これから大丈夫だろうか…」
と大人たちはため息をするしかなかった。

カガリ「え…お前アスランと婚約しているのか…」
ラクス「はい。アスランのことをご存知なのですか？」
カガリ「幼なじみなんだ…」
ラクス「そうなのですか…。じゃああなたはなぜナチュラルのみなさんと一緒に戦っているのですか？」
カガリ「友達を守るためだよ」
ラクス「…それだけですか？」
カガリ「…ああ」
ラクス「降伏すれば全員の命は救われると思いますが」
カガリ「…あいつらがそんなに優しいとは思えんが？」
ラクス「私が身の安全を保障させます。だから…」
カガリ「…好意だけ受け取るよ。だけどそうはいかない」
ラクス「なぜそこまで拒否するのですか？コーディネーターですのに。…話していて思ったのですがあなたはときどき遠くを見ることがあるのです。あなたが戦う理由は別にあるような…」

カガリ「…話しはここまでだ。部屋にいろよ」
ラクス「カガリさん…！」
カガリ「…一つだけいう。私は…『力』が欲しかった。全てを守る『力』が…」
と意味深なことをいって部屋をあとにした。

第6話（後書き）

キラ「ついにラクス登場！」
アスラン「前回エールでるっていったのにちょっとしかでていないんだが…」
カガリ「まあいきあたりばったりだからな」
フレイ「それをいっちゃおしまいよ」
ラクス「次回は私が人質にされてしまう回でしたわね」
カガリ「なんだ根にもってるのか」
ラクス「そこまで器は小さくありません」

第7話

ラクスの尋問が終えたあとカガリは食堂にいった。
ミリアリア「あ、カガリ終わったの？」
カガリ「ああとりあえずな」トール「ラクス・クラインか…。確かプラントで有名な歌手だよな」
カガリ「そうなのか？」カズイ「でも…あれも遺伝子をいじってあの歌唱力を持っているんだよね…」
フレイ「ただのズルじゃない！だからコーディネーターは嫌いなの」
カガリ「…フレイ私もその『ズル』したコーディネーターだが」
フレイ「だからなに？悪口を言うなってこと！？」
サイ「フレイよせって…！」
フレイ「ふん…！」
フレイは気分を悪くしたのか食堂から出ていってしまった。サイもその後を追った。
ミリアリア「…いいの？」
カガリ「もう慣れた」
と答えたあと食事をした。

カガリが去った後、ラクスはカガリのことを考えた。自分の婚約者が幼なじみだったことやコーディネーターでありながらナチュラルの…友達を守るために戦う。理由に筋は通っているがなにかひっかかる。単に友達を守るためだけだろうか。
ラクス「なにか別の意思がありそうですわね…」ラクスは悩んだがそれを後回しにしてアスランのことを考えた。確かに政略結婚だが自分もアスランのことは好きだ。だが幼なじみがいるといえば話しは別。できれば身を退きたい。
ラクス「…また話してみたいですわ…」

アスラン「ラクス大丈夫だろうか…」
クルーゼ隊はアークエンジェルの追跡任務中にラクス行方不明の知らせを受けて捜索任務にあたっている。
イザーク「ふん！お前の婚約者だからな。大丈夫だろう」
アスラン「ちょっと待てどういう意味だ？」
イザーク「想像に任せるよ」
ニコル「イザークやめてください…」
ディアッカ「まあ婚約者を心配するのはいいけどリラックスしろよ」
イザーク「貴様はリラックスしすぎだ！」
アスラン「それよりも今度はお前らだろ偵察早く行けよ。うるさいから」イザ・ディ「だとコラァァァァ！」
クルーゼ「なに騒いでいる？早く行かないか！」イザ・ディ「了解…」
二人は部屋から出ていった。
アスラン「ふん…」
ニコル「アスランイライラする気持ちはわかりますけどあたらないでください」
アスラン「すまない。最近色々あってな」
ニコル「ラクス様のことですか？」
アスラン「それだけだったらどれだけいいか…」アスランは聞こえないようにつぶやいた。

フレイ「パパが来るの！？」
マリュー「ええ、あなたのことをいったら会いに来るらしいわ」
フレイ「よかった…！」フレイの父親は事務次官で高い地位にいる。
ムウ「でもザフトも察知するだろうな。俺と嬢ちゃんだけで大丈夫か？」マリュー「無理も承知だけどがんばってもらうしかないわ」
ムウ「まじかよ…」

ミリアリア「…さっきのことで機嫌が悪いと思うけどフレイのお父

さんがいるの。助けてあげて」カガリ「…あの程度で機嫌が悪くならん」
ミリアリア「ありがとう…。ストライク発進どうぞ！」
カガリ「カガリ・ヤマト、ストライク行くぞ！」エールストライクは戦場に飛び出した。もうすでにザフトと交戦しており連合が劣勢だ。
カガリ「ええい！」
ストライクはビームライフルで敵を次々と撃破した。ムウのメビウス・ゼロもガンバレルで撃破した。しかし…
サイ「熱源接近！これは…！Gシリーズです！」ナタル「こんなときに！？」
ストライクとメビウス・ゼロはGシリーズと交戦に入った。ストライクはイージスとデュエルと、メビウス・ゼロはバスターとブリッツと。
イザーク「こいつ…！」アスラン「カガリ…まえより動きがいい！」
イージスとデュエルは2対1なのに関わらず、苦戦していた。攻撃がなかなか当たらずストライクに反撃される。ヒット&アウェイを心得ている。イザーク「こいつー！」デュエルは突っ込んだが、ストライクに蹴られ吹き飛ばされる。
アスラン「イザーク！…カガリやめてくれ！戦いをやめろ！」
カガリ「お前こそ！あの艦には友達の親が…」
といいかけた時だ。
ナタル「ザフトに告ぐ！我々はプラント最高議長の娘ラクス・クラインを保護している！戦闘を中止せよ！この勧告が守られない場合責任放棄とし我々がしかるべき措置をとる！」
カガ・アス「！！！」
アークエンジェルからそう全域に通信が入った。簡単にいえばラクスを人質に取ったのだ。
が、時すでに遅くバスターがフレイの父親が乗った艦を破壊していた。

フレイ「イヤァァァァー！」
サイ「フレイ！…艦長、フレイを医務室に連れていきます！」
マリュー「ええ、お願い！」

アスラン「カガリ…！これが君の守るものか！？」
カガリ「…」
アスラン「必ず取り戻す…！」
カガリ「…るさい」
アスラン「？」
カガリ「うるさい黙れ！」
アスラン「カガリ…？」カガリ「私だって知らない！こんなこと！それに…」
このときカガリは知らなかったが周波数がラクスのいる部屋の通信装置にもあった。ラクスは部屋にもどると突然の大声に驚いた。
ラクス「カガリさん…？」
カガリ「突然プラントに戻ったと思えばザフトに入って婚約者もいる！？ふざけるな！私はお前に再会することを楽しみにしていたのに！いたのに…！」
途中から涙声も混じった。
カガリ「…グス、お前だってヒック…裏切ったじゃグス…ないか…」
アスラン「カガリ…」
カガリ「…ラクスは絶対にお前のところにかえす。それでいいだろ…！」アスラン「カガリ俺は…！」カガリ「…じゃあな」
ストライクはアークエンジェルに向かった。
アスラン「…くそ！俺は…！」

カガリは帰還する途中アスランのことを考えまた涙があふれた。
カガリ「…グス、なんだよヒック…。く…ううう…ウアアーン！」

第7話（後書き）

キラ「え、まさかの三角関係…！」
アスラン「ラクスは身を退こうとしているがカガリは諦めかけている…どうなるんだ？」
フレイ「それよりも！パパ死んじゃったじゃない…！ｏｒｚ」
ラクス「三角関係の前ではどうでもいいですわ」カガリ「うぉい！」
キラ「これでフレイもどうなるかわからないね」フレイ「せめて生き残れますように…！」
アスラン「どうなるかな…。次回はラクスの返却の話しだ。」
キラ「三角関係はどうなるかな…？」

第8話

アークエンジェルに帰還したカガリにフレイが怒鳴ってきた。
フレイ「あなた！なんでパパを守ってくれなかったの！？」
カガリ「…」
フレイ「自分がコーディネーターだから手加減していたんでしょ！？」
カガリ「…」
カガリは黙ったまま拳を握っていた。
フレイ「なにかいいなさいよ…！」
とフレイはカガリの頬を張った。
ミリアリア「ちょっとフレイ…！」
フレイ「なんでとめるのよ！？こいつが本気でパパを守らないから…！」カガリ「…本気でやったよ…！」
カガリが口をひらいた。カガリ「なんも確証もないのに適当なことというな…！」
フレイ「なによ！パパを救えなかったくせに！」カガリ「勝手に人質を使うお前に言われる筋合いはない！」
フレイ「使えるものを使っただけだわ！どうせあいつはここでしか役に立たないわ！あなたたちパイロットも戦うしか役に立たないわ！」
といった時だ。
ガン！
カガリの拳がフレイの頬をかすめ壁を殴った。
カガリ「…次私達をそんなふうにいったらてめえの顔世間に出せないようにするからな…！」
フレイ「ヒ…！」
カガリは着替えにロッカーへ向かった。

ミリアリア「カガリ…」フレイ「なんなのよ…！」

カガリは自室に戻りベッドに横になっていた。アスランのことを考えていた。

カガリ「くそ…なんだよ…」

カガリとアスランは幼なじみで性格は逆だがなぜか気があった。カガリはすぐ熱くなりアスランによくからかわれていた。年月が経つにつれお互い愛しあっていた。周りから「この二人は将来絶対に結婚する」と言われるほど。だが敵同士になったいま殺し合う間になってしまった。そしてアスランには婚約者がいる。カガリ「…あいつのとこに行くか…」

カガリはあいつ…ラクスのところに向かった。

カガリ「…入るぞ」

ラクス「カガリさん…よくいらっしゃいました。また会いたかったですわ」

カガリ「…そうか」

ラクス「…さっきのアスランのやり取り聞きました」

カガリ「！」

ラクス「あなたの思いはわかりました。…確かに私とアスランは婚約しています。しかしこれは政略結婚ですので…」

カガリ「…だからなんだよ」

ラクス「あの…お互い好きとかそういう感情は…」

カガリ「もういいよ…」ラクス「カガリさん…？」

カガリ「私達はもう敵同士なんだ。私はアスランのこと好きだけどアスランはもう…」

ラクス「諦めてはいけません！」

ラクスがいきなり立ち上がった。

ラクス「確かにあなたたちは敵同士です。だからなんですか！？あなたは好きなんでしょう！アスランのことが！ならいいじゃないで

すかそれで！」
カガリ「ラクス…」
ラクス「今度会った時思いをもっとぶつけなさい。アスランも分かってくれるはずです」
カガリ「ラクス…ありがとう」
ラクス「当然のことです。友達ですから」
カガリ「友達…？」
ラクス「ええ、私達はもう友達ですわ」
カガリ「…ありがとう」カガリは嬉しそうに笑った。

カガリは部屋から出たあとマリューに会った。
マリュー「カガリさんお疲れさま。さっきの戦闘は…」
カガリ「守りきれなかったのは私の落ち度だ…。人質の件はフレイの独断ですよね」
マリュー「ええ…そのことなんだけど…」
カガリ「何かあったんですか？」
マリュー「もう少しで大気圏近くなんだけど…そこで連合の部隊と合流するの」
カガリ「え…？じゃあ…！」
マリュー「ラクス・クラインも引き渡されるわね…」
カガリ「そんな！なんとか…！」
マリュー「残念ながら避けられないわ…」
とマリューはブリッジに向かった。
カガリ「なんだよ…！…仕方ない…！」

カガリ「ラクス！」
ラクス「カガリさん…？どうなさったのですか？宇宙服を持ってきて…」カガリ「お前をザフトに返す！」
ラクス「え…？」
カガリ「お前を連合に渡すわけにはいかない！」カガリはラクスに

宇宙服を着せると格納庫に向かった。

カガリとラクスはストライクに乗り、アークエンジェルを出た。途中でアスランが一人だけ来るようにザフトに通信をいれた。
カガリ「これでよし…」ラクス「ありがとうございますこんなことをしてくださって」
カガリ「いいんだよ。それに私達友達だろ？」
ラクス「…ハイ！」
カガリ「さてと来たか…」
通信の通りイージス一機で来た。
アスラン「カガリ…」
カガリ「…ラクスは返す。約束通りな…」
ラクスはイージスに飛び乗った。
ラクス「アスランごきげんよう」
アスラン「怪我は？」
ラクス「ないですわ。カガリさんが優しくしてくれました」
アスラン「そうか…。…カガリ、今回のことは礼を言う」
カガリ「…当然のことをしたまでだ」
アスラン「…カガリ…あのさ…ごめん！」
カガリ「なんだいきなり」
アスラン「突然プラントに行ったり婚約したり…。君のこと考えなくて…」
カガリ「…私も悪かったよ。さっきは子供みたいに怒鳴って…」
ラクス「よかったですわ仲直りして…。…カガリさん。あなたはこちらにこないのですか？」
アスラン「ラクス言う通りだ…。こっちに来てくれ」
カガリ「…ごめん」
カガリは謝っただけだ。アスラン「なんで…！」ラクス「あなたは本当に友達を守りたいだけなのですか？」
カガリ「…そうだよ。それに…お前とは一緒にいられないんだ」

アスラン「どうして…？」
カガリ「以前とは違うんだ…。体も心も…。知ってしまったから…」
カガリはストライクを反対側に向けて飛び去った。
アスラン「…なんだ…？一体カガリに何が…」
ラクス「何かあったのでしょうね…。あなたがたが別れて再会するまでに…」

第8話（後書き）

キラ「最初のカガリ怖いよ！」
カガリ「フレイが悪いんだ」
アスラン「まあとりあえずラクスを無事にザフトに返したわけだ」
ラクス「最後カガリさんは何を言いたいのでしょう？」
カガリ「それはお楽しみってことで」

キラ「思ったんだけどさ」
アスラン「どうした？」キラ「Gジェネにイグルー2出れるかな？」
カガリ「微妙だな…。2話と3話の奴は機体が出るし」
アスラン「1話は？」
カガリ「オペレーション〇イでやれ」
バーバリー「…泣けるで」
キラ「なんであなたがいるの！」

第9話（前書き）

更新遅れてすいません。

第9話

ラクスをザフトに返したカガリに待っていたのは…トイレ掃除という罰だった。
カガリは素直にアークエンジェルに帰還したがマリューにこっぴどく怒られた。本来なら銃殺刑だがストライクを動かせるのがカガリしかおらず、こうしてトイレ掃除をしているのだ。
カガリ「…たく、女の子にやらせるかなこんなこと…」
ムウ「まあ、自業自得だから仕方ないんじゃない嬢ちゃん？」
カガリ「嬢ちゃんはやめてくれ！それとここは女子トイレだぞ！」
ムウ「掃除中だからいいじゃん」
カガリ「よくない！用がないならどっかにいけ！」
ムウ「ハイハイ」
ムウはトイレから出ていった。

ラクスを取り返したアスランはラクスを見送りにいった。
ラクス「すいません私のために…」
アスラン「いいんだ、謝らなくても。議長にまた会いに行きますっていってくれ」
ラクス「はい…。アスランはお父様にお会いにならないのですか…？」
アスラン「前報告のときに話したよ…。ハァ…」ラクス「どうしたのですか？」
アスラン「あまり話したくないんだよ…。口を開くとナチュラルの悪口ばかりだ…。母さんを亡くしたのはわかるけど…」ラクス「うまくいってないようですわね…」
アスラン「まあな。次期議長の候補…まあほぼ確定だが。なったら世論は変わるな…」

ラクス「アスランのお父様は強硬派で有名ですからね…」
アスラン「…本当に嫌なんだ…戦うことは…。カガリと会ってからますます…」
ラクス「本当にカガリさん思いですわね」
アスラン「…すまない婚約者なのにこんなことといって」
ラクス「別にかまいませんわ」
アスラン「すまない…。さあ…もういってください」
ラクス「わかりました。…アスラン」
アスラン「なんだ…？」ラクス「最後まで諦めないでカガリさんとお話ししてください。好きな人と殺し合うのはもういやですわ」
アスラン「…わかった」
アークエンジェルは少しで地球連合艦隊と合流するところだ。
ミリアリア「もうすぐ地球ね…」
トール「久しぶりだな…。そういえば連合と合流するけどそこで民間人は降ろすってさ」カズイ「ほ、本当！？」ミリアリア「でも私達は一時的とはいえオペレーターをやったからね…。降ろしてくれるかな…？」
トール「まあ俺たちはともかくフレイは？」
サイ「…降りるってさ。もうこんなところにいられないって怒ってた」
ミリアリア「やっぱりお父さんのことショックだったのね…」
トール「…カガリはどうするのかな？」
ミリアリア「降りる…かな？」
サイ「コーディネーターと戦っているからな降りるだろ？」
トール「そうか…？」
カズイ「なんか最近…怖いんだ…カガリが…。同じコーディネーターなのに容赦ないし…」
ミリアリア「そんなことといわないの！私達を守るために戦っているだけよ！」
これまでに何度もザフトの襲撃をうけたがカガリのおかげでここま

で生き延びた。が、カガリは同じコーディネーターに容赦がなく先日もデュエルのコックピットを傷をつけた。パイロットは無事だろうが怪我はしただろう。今までの戦いにトール達は恐怖を感じた。

カガリはトイレ掃除が終わり部屋に戻ったがマリューにブリッジに呼び出された。

カガリ「今度はなんだ…どこの掃除だ…？」

とブツブツ言いながらブリッジに行った。

マリュー「きたわね」

カガリ「…なんでしょうか」

マリュー「もうすぐ連合軍と合流するのは知ってるわね」

カガリ「ええ…」

マリュー「そこで民間人も降りるけど…カガリはどうするの？あなたもなしくずしに乗ったとはいえ民間人でしょ？」

カガリ「だから私には降りる権利はあると…？」マリュー「ええ、どうするの？」

カガリ「…とっくに決まっています」

マリュー「…じゃあ降り…」

カガリ「パイロット続けるよ」

マリュー「…はい？」

ムウ「へ？」

ナタル「え？」

カガリの答えにマリューだけではなくムウやナタルも驚いた。

カガリ「だからストライクに乗るよ」

マリュー「で、でも…」カガリ「…確かに私は民間人だしコーディネーターだけど周りのこと何も知らなかった…。中立のコロニーにいることで戦争という現実から目を背けていたんだ。ストライクに乗っていて感じたよ。こんな戦争は早く終わらせたい…！」

ムウ「でも嬢ちゃんはこれから同族と戦うことになるぜ。覚悟はあるのか？」

カガリ「…できています！」
ムウ「だとさ…どうする艦長？」
マリュー「…わかったわ。軍に入る手続きは合流してからよ」
カガリ「ありがとうございます！」
カガリは笑顔で礼を言いブリッジをあとにした。ナタル「いいのですか？」
マリュー「…あそこまで言ったもの。覚悟は本物よ」
ムウ「まあこれからどうなるかねぇ…」
ブリッジをあとにしたカガリは部屋に戻った。
カガリ「…我ながらよくあんなこと言えたな…。…これで戦える…！それが…私の存在する意味だからな…！」

第9話（後書き）

キラ「…もうカガリがどこに行きたいのかわからない」
アスラン「…怖いんだが…」
シン「将来あれと戦うのかよ…」
アスラン「って普通にでてくるな！出番はまだ先だろ！」
シン「いや作者が出演ＯＫしてくれたら出たんだけど…」
カガリ「作者はシンのこと嫌いと聞いたが…」
ラクス「たぶんろくなことに使われないかもしれませんわ。例えば八つ当たりされる係とか…」
シン「そんなことないですよ。ねぇみんな」
「「……」」
シン「なんで黙るの！？不安なんだけど！」
キラ「次回は…フレイファンの人ごめんなさい」フレイ「？なにその次回予告！」

第１０話（前書き）

今回は少し長いです。

第１０話

アークエンジェルは無事にハルバートン率いる第８艦隊と合流した。
ムウ「ハルバートン提督か…。確か艦長の上司にあたる方だよな？」
マリュー「ええ、彼がアークエンジェルとＸナンバーの開発計画を後押ししてくれたのよ」
ムウ「よく説得してくれたよ。頭の堅い上層部を」
マリュー「ええ…。それよりもカガリさんのことだけど…」
ムウ「嬢ちゃんはああいきこんじゃいるけど…許してくれるかねぇ…」

カガリは一人で食堂で食事をしていた。そこにミリアリア達が来た。
ミリアリア「カガリ！あなた軍に志願したって本当？」
カガリ「そうだが？」
カガリは当たり前のように答えた。
トール「いや、当然だみたいに答えられても…」
サイ「何を意味するのかわかってるのか？」
カガリ「…わかってるよ。同胞を殺すことになるかもな」
トール「だったら…！」
カガリ「私達が艦を降りても戦争は続いているんだ。なにも変わらない。だから…私がこの戦争を終わらせてみせる」
ミリアリア「本気…？」
カガリ「ああ。なあにコーディネーターがナチュラルのこと認めたらすぐ終わるよ」
サイ「しかし…」
カガリ「そんなことよりもお前らは降りるだろ？ここに残る意味もないしな」
トール「…いや、俺は残る」

予想もしなかったトールの答えにカガリは驚いた。
カガリ「お前なにいってるんだ！？」
トール「カガリがさっき言ったように降りても戦争は続いているんだ。どっちも一緒だからな。だったら残って戦争を終わらせるために戦う方がいいだろ？」
サイ「トールの言う通りだな…。俺も残る」
ミリアリア「だったら私も！」
カズイ「なら僕も…」
カガリ「おいおい…」
カガリはあきれて頭をかかえた。
カガリ「…本気かよ…」
「「本気だ！」」
四人がそろって言った。
カガリ「…わかったよ。艦長には…なんか用事があるみたいだからフラガ大尉にそう言ってこいよ」
トール「そうするよ！」
とトール達は食堂から出ていった。

一方ブリッジにはマリューとナタルとメネラオスから来たハルバートンがいた。
ハルバートン「よく無事だったな！ヘリオポリスが崩壊したと聞いた時は駄目かと思ったよ」
マリュー「ありがとうございます閣下」
マリューとナタルは敬礼をした。
ハルバートン「４機のＸナンバーが奪われたのは痛いがストライクだけは無事だったのは幸運だな…」
マリュー「ええ…そのことですがパイロットのことはご存知ですよね？」
ハルバートン「ああ…民間人のコーディネーターだそうだね」
マリュー「はい…。その子が軍に志願しているのです」

ハルバートン「なんだと？」
ナタル「大尉の言う通りです。本人は本気のようですが…」
ハルバートン「むぅ…。…その子を連れてきてくれないか？話がしたい」
マリュー「わかりました」
とマリューが呼びに行こうとしたときにムウがブリッジに入ってきた。
ムウ「艦長…。…！失礼しました閣下！まだお話中でしたか」
ハルバートン「構わないよ。で、どうしたのかね？」
ムウ「ヘリオポリスの子供達が軍に残るって言い出して…」
マリュー「え…？」
ムウ「まあ動機は十分ですけど…。どうする？」
ナタル「他はいいとして…。ストライクのパイロットは残ってほしいところです」
ムウ「嬢ちゃんか…」
マリュー「ええ…今から呼びに行くわ」
とマリューはブリッジから出ていった。

しばらくしてマリューがカガリを連れて戻ってきた。
カガリ「この人は？」
マリュー「ハルバートン閣下よ。ＭＳの開発の後押しをしてくれた人よ」
カガリ「どうも…」
カガリはお辞儀をした。
ハルバートン「君がストライクのパイロットか…。今までアークエンジェルを守ってくれてありがとう」
カガリ「そんな礼なんて…！私はただ友達守りたかっただけですから…」
ハルバートン「もうすぐ連合軍はアラスカに降りるし、民間のシャトルもある。残る理由はないと思うのだが。ましてや君はコーディ

ネーターだろ？」
カガリ「わかってます。でもただ戦争の恐怖に怯えているのもいやだから…」
ハルバートン「それで君が戦争をとめるために戦うと」
カガリ「はい！」
ハルバートン「…あまり自惚れないほうがいい。君個人の力だけでなんとかなるようなものじゃないぞ」
カガリ「でも私強いですから！」
ハルバートン「やはり若いな…。敵を撃つだけでは終わらんぞ？」
カガリ「だけど…」
ハルバートン「軍に残るのは許可する。だけどそのなかで学べ！…以上だ…。私は戻る」
マリュー「了解しました…」
マリュー達はハルバートンを見送ったがカガリはうつむいていた。
カガリ「戦争って勝てばいいんじゃないのか…！」
と小声で怒った。

一方格納庫では民間人のシャトルの乗り込みが行われていた。
フレイ「え…？じゃあサイは軍に残るの！？」
サイ「ああ…。しばらく離ればなれになっちゃうけど戦争が終わったらまた会おう」
フレイ「…わかったわ。早くコーディネーターを全滅させてね！」
と笑顔で言った。
サイ「おいフレイ…！不謹慎だぞ…」
フレイ「なんで？それがこの戦争の目的でしょ？」
先日父親を殺されてからフレイの精神は異常だった。コーディネーターに対して凄い暴言をはきまくったのだ。
サイ「…もうシャトルいっちゃうぞ」
フレイ「ええ…じゃあね…」
とフレイはシャトルに乗り込んだ。

このときは想像がつかなかった。まさかあんなことは…。
連合艦隊が大気圏突入態勢に入ったところに思わぬ介入があった。
ミリアリア「レーダーに感！ザフトです！」
ナタル「なに！？」
マリュー「このタイミングで！」ムウ「当然だろうな。データを持ち帰っては欲しくないだろうなザフトは…！」
ナタル「どうします？」
アークエンジェルは大気圏突入態勢だ。マリューが対応に困っていたところにメネラオスから通信がきた。
ハルバートン「ラミアス大尉！ザフトは我々に任せて君たちはシャトルをだして大気圏突入をしたまえ！」
マリュー「…ですがシャトルが危険です！」
とマリューが反論したとき、待機していたストライクから通信が入った。
カガリ「なら私だけでもだしてくれ！」
ナタル「少尉？」
ナタルはカガリを先ほど軍に志願したためついた階級で呼んだ。
カガリ「ストライクならいざとなったら単機で大気圏突入ができます」
マリュー「でも…」
ナタル「艦長、少尉の言う通りだと思います。このままだとただの的です！」
マリュー「…わかったわ。出撃してちょうだい」
カガリ「わかりました！」
サイ「カガリ、シャトルにはフレイが乗っている。…あいつのことをどう思っているかはわからないけど守ってくれ…」
カガリ「…了解」
ミリアリア「ストライク発進どうぞ！」
カガリ「カガリ・ヤマト、ストライク行くぞ！」

アークエンジェルから出撃したカガリだったが重力に引き寄せられる感じに苛立った。
カガリ「くそ！機体の動きが重い！」
と悪態をついた時だ。
ザフト側のXナンバーが来た。
カガリ「ち…！やはり来たか！」
引き寄せられる感覚に慣れないながらも機体をむかわせた。

一方のザフトのXナンバーのパイロットの四人も重力に苛立っていた。その上地球の重力は初めてなのでカガリより動きが鈍い。
イザーク「くそ！」
ディアッカ「うっとうしいなこの感覚！」
ニコル「機体が重いですね…。アスラン、大丈夫ですか？」
アスラン「ああ、大丈夫…。心配無用だ」
ディアッカ「たく…。俺は艦をやる！」
ニコル「じゃあ僕は護衛機を叩きます」
アスラン「わかった。イザークは…」
イザーク「俺はストライクをやる！」
と先にいってしまった。
アスラン「ちょ…！」
ディアッカ「あ～あ。あいつストライクに顔に傷をつけられてかなり頭にきているな。アスラン、イザークの子守頼んだよ」
とバスターもいってしまった。
ニコル「ディアッカ…！アスランすいません、ぼくからもお願いします」
アスラン「わかったよ…。気をつけろよ」
ニコル「はい！」
ブリッツは艦隊にイージスはストライクに向かった。

イザーク「ストライクー！」
デュエルはサーベルを抜いてストライクに切りかかった。
カガリ「ち！」
ストライクもサーベルを抜いてガードした。
今回のデュエルはアーマーがついていて武器も追加されていた。デュエルの火力不足を補ったのだろう。
デュエルは距離を取って肩のシウ〝ァを撃った。ストライクはそれを避けつつライフルを撃った。
イザーク「くそー！」
デュエルはミサイルをばらまいた。
カガリ「その程度！」
ストライクは避けないでデュエルに突っ込んだ。ストライクはデュエルを蹴って吹き飛ばしその隙にデュエルのライフルを撃った。
イザーク「くそ！」
アスラン「イザーク！」
イザーク「アスラン！何しに来た！？」
アスラン「何しにって…助けにだよ…」
アスランはイザークの八つ当たりに呆れながら答えた。
イザーク「貴様の助けなぞいらん！それをよこせ！」
とイージスのライフルを奪った。
アスラン「イザーク！たく！」
イージスもサーベルを抜いてストライクに向かった。

一方艦隊はザフトの攻撃で壊滅状態だった。メネラオスもところどころから煙が出ていた。
ハルバートン「くそ…！元々我々のものにやられるとはな！」
マリュー「閣下危険です、脱出を！」
メネラオスの状態を心配したのかマリューは通信をした。
ハルバートン「…もう無駄だ…。私自身も少し…怪我をしてね…。ごふ…！」

マリュー「閣下！」
マリューは泣きそうな顔で叫んだ。
ハルバートン「…すまないラミアス大尉。あとは頼んだ…」
と通信を切った。そしてメネラオスはザフトの艦、ガモフに特攻し爆発した。
マリュー「閣下…」
ナタル「…道が開きました。艦長…」
マリュー「…わかってるわ。ストライクは？」
ミリアリア「デュエルとイージスと交戦中です！」
マリュー「もう少しでタイムリミットよ。戻るように伝えて」
サイ「それが…大気圏突入の影響で通信が…」
マリュー「…本人の判断に任せるしかないわね…」

ストライクはデュエルとイージスの2機に互角の戦いをしていた。
アスラン「おいおい…！2機相手にもつとは…！」
イザーク「アスラン！貴様はライフルをもっていないから邪魔だ！」
アスラン「それはお前が奪ったからだろうが！」
とケンカしていた。
ストライクはサーベルでイージスに切りかかった。
アスラン「ってカガリ！俺を殺す気か！？」
カガリ「お前は敵だろうが！」
アスラン「カガリ…！？」
アスランは愕然とした。カガリのことだから「お前と戦いたくない！」と泣き顔で（アスランの勝手な妄想）言ってくると思った。が、どうだ？殺る気まんまんだった。
そう考えている今でもストライクはサーベルでイージスに切りかかった。
アスラン「カガリ！」
イージスはストライクを蹴って距離を離した。

イザーク「よし！今なら…！」
デュエルはライフルでストライクを撃とうとした。
アスラン「イザークやめ…！ん？なにかこっちに…」
アスランは止めようとしたがレーダーになにか反応した。来たのは…。
アスラン「シャトルか…。ってイザーク撃つのをやめろ！」
イザーク「落ちろ！」
止めるのが遅かった。デュエルはライフルを撃ち、当たったのは…シャトルの方だった。
カガリ「な…！」
アスラン「くそ…！なんてことを！イザーク戻るぞ！」
イザーク「なに！？俺はまだ…」
アスラン「つべこべ言わずに戻れ！それともシャトルの件ばらされたいか！？」
イザーク「くそ…！」
イザークはしぶしぶ従った。偶然とはいえ民間のシャトルを撃った。これがなにを意味するのかわかっていた。

カガリ「フレイ…」
カガリはぼんやりしていた。嫌な奴とはいえ、知り合いだった。それが死んだ。ショックだった。ストライクは重力に引かれて落ちていった。

シャトルの撃墜はアークエンジェルからも確認できた。
サイ「フレイー！」
ミリアリア「そんな…！」
ナタル「悲しむのは後にしろ！…ストライクは？」
ミリアリア「…大気圏突入中です…。コースから外れています」
マリュー「どこに落ちるか計算できる？」
サイ「ちょっと待ってください。…そんな…！ここは！」

ナタル「どこだ？」
サイ「本艦予定降下地は…アフリカ北部！」
その答えに一同は青ざめた。
サイ「ザフトの勢力圏です！」

第１０話（後書き）

シン「残念でしたね、一話しかでれなくて」
ハルバートン「いいんだよ。私みたいなのがこの後書きにでれることが奇跡だよ」
フレイ「…」
シン「で、ですね…」
マリュー「それにしてもカガリさんのこと『さん』づけでいいのかしら？」
キラ「今のところ代案がありませんからね」
フレイ「…」
カガリ「さっきからなんだお前…」
フレイ「なんだとはなによ！こんなに早く退場するなんて私聞いてない！」
アスラン「どこの関西スリッパツッコミ娘？」
ラクス「でもこのままアークエンジェルに残っても…ねぇ…？どうやってカガリさんのこと利用するのですか？」
フレイ「う～、どっちに転んでもいいことないじゃない！この怒りをどこにぶつければ…！」
カガリ「シンにぶつければ？」
シン「Σなんで俺！？」
カガリ「はっきり言って今のところシンは内容に不満を持った人の相手だからな。ま、がんばれよ（笑）」
シン「アスハー！本編の恨みか！」
カガリ「…そんな気なかったけど言われるとなんか私もボコボコにしようかな…（黒笑）」←サガークベルト装備
シン「ちょ…！作品違う！なんで持って…イタァ！待て、ムチで叩くな…グフォ！やめろー！なんか目覚め…アーーー！」
キラ「うわぁ…見てられないよ…。ってフレイいいの？」

フレイ「いいわよ。別の機会にするわ、かわいそうだし」
シン「別の機会ってまたやるの！？」
カガリ「おら逃げるな」←必殺技発動
シン「ギャアアー！」
アスラン「ひどいもんだな…」
キラ「もう止めようよ」
アスラン「しばらくしたらな。次回はいよいよ地上編だ」
キラ「やっと僕の出番か。どう絡んでくるかな？」
ラクス「それでは次回をお楽しみに！」
シン「え、ちょ…！このまま終わり！？なんかアスハはダークキバになってるし！必殺技発動しようとしてるし！え、まじですいません！だからやめ…！アーーー！」

第１１話（前書き）

すいません。また間があきましたｍ（＿＿）ｍ

第11話

カガリ「グウゥゥ…！」
砂漠に落下したストライクの中でカガリは目覚めた。
カガリ（暑い…。息をするたびに肺が焦げそうだ…！）
カガリはヘルメットを取り、パイロットスーツの前を少し開けた。
カガリ「フレイ…」
カガリは先ほど散った人物を思い返した。最初は普通の女性だったのに戦争によって変わってしまった。
カガリ「…ふん、まあそれが案外あいつの本性だろうな…」
だが同情しなかった。散々自分のことを悪く言ったのだ。当然だ、とカガリは思った。そんなことよりも…
カガリ「アスラン…」
カガリは先ほどの戦闘でアスランに言い放ったことが自分でも信じられなかった。
カガリ「私は…何を言って…。私はあいつのことを…」
とカガリは涙を流した。あの時アスランと戦って楽しいという感情だった。楽しいわけがない。しかし…
カガリ「だけど…これが私だから…！」
この時からカガリは戦争という狂気の波にのまれつつあった。

アークエンジェルは地球連合軍第八艦隊という犠牲を払って地球に降りたが、本来の目的から大きく離れ、アフリカ大陸北部、すなわちザフトの勢力圏の真っ只中にいた。
ミリアリア「大丈夫カガリ？」
彼女の前には高熱でうなされているカガリの姿があった。
先ほど回収されたものの突然倒れたため医務室に運ばれた。
カガリ「もう…大丈夫だ…。心配するなって…」

トール「でも、すごい熱だろ？」
カガリ「本当に大丈夫だって…。私コーディネーターだし…」
ミリアリア「でも同じ人間でしょ？そんなこと言わないの」
カガリ「ありがとう…。そういえばサイは？」
トール「自分の部屋にいるよ…。やっぱりフレイのことショックだったみたい」
カガリ「ごめん私のせいで…」
トール「そう自分を責めるなよ…」
ミリアリア「そうよ…。とりあえず寝てた方がいいよ」
カガリ「そう言われると気が楽になるよ…。…おやすみ」
といってカガリは目を閉じた。よほど疲れていたのかすぐに寝てしまった。

一方マリュー達は艦長室で今後について話合っていた。
ムウ「みごとに敵の勢力圏だ…。まいったねぇ」
マリュー「仕方ありません。あのままストライクと離れる訳にはいかなかったのですから」
と答えるが、彼女の表情には迷いがあった。
友軍にはザフトが設置したNジャマーのせいで連絡は取れない、現戦力は第八艦隊から受け取った2機のスカイグラスパー（操縦できるのがムウだけなので1機だけ）、そしてストライクのみである。もし自分が頭の切れる名将だったらなんとかできるがあいにくそうではない。というよりそうだったとしてもなんとかできるのだろうか。
マリュー「ともかく、本艦は当初の目的通りアラスカに向かいます」
ムウ「…まあそんなに気張りなさんな。俺達も頑張るからよ」
マリュー「…期待してます」
ムウ「了解…。じゃあなそろそろ寝なよ。夜更かしは体に毒だぜ？」
といってムウは部屋から出て行った。
マリュー「先が思いやられるわ…」

第１１話（後書き）

キラ「やっとだよ…」
アスラン「１ヶ月近くあいたよな？」
カガリ「潰すか？」←ドッカハンマー装備
シン「？どこから持ってきたの！？てかやめて！」
カガリ「（チッ…）冗談だよ」
シン「うん、ツッコミたいけど怖いから無視で」
ラクス「というよりも後書きのカガリさん怖いですわ…」
カガリ「大丈夫だ。なるべくシン限定にするから」
シン以外「「「なら安心」」」
シン「俺安心じゃねえーーー！」

カガリ「ガンダム関係ないけどクラヒーフォーゼおもしろかったな」
キラ「本当に関係ないね」
アスラン「今まで超必殺技がなかったライダーの超必殺技もかっこよかったな」ラクス「シリーズをかさねるごとに段々進化してますからね」
キラ「特にカブト系がかっこよかったかな、個人的に」
アスラン「昭和もかっこよかったな、ナレーションついてて」
カガリ「私は…」
シン「『地獄兄弟かっこいい！』っていいそう」
ラクス「なぜですか？」
シン「すぐやさぐれそう」
カガリ「…」
『タカ・クジャク・コンドル・ギン・ギン・ギン・ギン！ギガスキャン！』
シン「　」←丸焼き
アスラン「あれはシンが悪い」（一番よかったのはＢＬＡＣＫ）

ラクス「ですわね」（カイザがよかった）
キラ「元気出してよ。スパロボＫじゃ大活躍でしょ」（ＮＥＷ電王がｒｙ）
カガリ「私だってなあ…『ファンネル！』って叫びたいよ…。他作品のロボットと大戦（ｎｏｔ誤字）したいよ…」（タジャドルｒｙ）
シン「調子に…のって…すいません」（ダークカブトｒｙ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2468x/

機動戦士ガンダムSEED ANOTHER WORLD

2011年12月3日23時52分発行